学処について

池　山　賢　二

学処（sikkhāpada）とは「学ぶべきことがら」ということである。南伝に於いては最初期経典（Dhp. Sn. Therag. 等）中にsīla. sikkhā等の言葉と共に、出家修行者に対する教え、実践の方法を指示したものと言えよう。後世三学が整備されると戒学においては学処は、戒つまり行為そのものとなるのだが、pātimokkha 程固有名詞的性格は強くなく、文字通り、「学ぶべきことがら」と解せられていた。これらの実践修行に関する指示は、後に発展し戒律箇条として整備されVinaya 中の Pātimokkha が成立していったと思われる。そして時間の経過とともに意味の変遷がみられ、sīla＝戒、Vinaya＝律、saṃvara＝律儀、等の区別が行われていったようだ。ところがsikkhāpada は、後世の教義の発展と共に特に区分、意味づけされる、ということもなく包括的な言葉としてその概念規定には柔軟性がある。ここでは後世の区分論議を一時離れて、sikkhāpadaの解釈の一試論を行ないたい。

まずDhammapada, Suttanipāta の偈頌の中から学処的性格が見いだされるものをとりあげてみると、示された修習の内容に大きな難易の差を認めることができる。この難易の差を一つの着眼点として分類を行なうと以下のような三分類が可能である。

(1)類　実践方法として極めて具体的であって直接的指示が為されているもの。

Dhp. 210「愛する人と会うな。愛しない人とも会うな。愛する人に会わないのは苦しい。また愛しない人に会うのも苦しい。」

Dhp. 232「ことばがむらむらするのを、まもり落ちつけよ。……」

Sn. 932「あらあらしいことばを以って答えてはならない。」

Sn. 830「このことわりを見て、論争してはならない。」

その他 Dhp. 50, 133, 197., Sn. 973 等

(2)類　悟り、安らぎ、（nibbāna, vimutti.）について指示したものがある。これらは少なくも第3者的に見る限り、抽象的指示がなされ、感覚的に直接的理解ができるものとは思われない。

Dhp. 378「修行僧は、身も静か、語も静か、心も静かで、よく精神統一をなし、世俗の享楽物を吐き捨てたならば、やすらぎに帰した人と呼ばれる。」

Sn. 1086「ヘーマカよ。この世において、見たり聞いたり考えたり識別した快美な事物に対する欲や、貧りを除きさることが、不滅のニッバーナの境地である。」

その他 Dhp. 353 等

(3)類　(1)類と(2)類との中間的な性格をもつ指示と考えられるもの。

Dhp. 343「愛欲に駆り立てられた人々は、わなにかかった兎のように、ばたばたする。それ故に修行僧は自己の離欲を望んで愛欲を除きされ。」

その他 Sn. 799, 942 等

まず(1)類としてとりあげた具体的指示は、これら自体を包括する、より抽象的形態での指示が、第(3)類に数多く見られる。多種多

様な第(3)類の指示の中で、わずかな特定のことがらのみが、第(1)類に示された如くの具体的直接的方法を明示した指示としてあげられている。そして sikkhāpada＝学ぶべきもの、という性格を配慮すると、第(1)類の特徴として次の点を考えることができる。

① 修行実践の方法や過程は、修自者自身の判断、思惟で行なうものではない。

② 実践の成否が、判断思惟を必要としない程明確であること。

この2点から次の如くの推論を立てたい。

「実践が、修行として有効であるか否かは修行者の判断・思惟、に頼っているわけでなく、それらによって左右されない。」

更に、修行（指示の実践）から効果の発揮に到る過程を表わす、機能構造として言換えられる。

「修行者が指示に従がい修行して得られる境地は、修行者本人が予想し、或いは、予想できうる境地として設定されているわけではない。」

次に第(2)類の nibbāna, vimutti, に関する指示の中に、注目すべき表現が含まれている。

Sn. 933「……諸々の煩悩の消滅した状態が『nibbāna』であると知って（ñatvā.）……。」

その他 Dhp. 378, Sn. 1089 等

これらの表現から推定されることは、修行として最後の段階である nibbāna. に達しても自分自身に於いて、そのことを直観的に知ることができるとは限らない、ということであろう。そしてこのことは、前述の第(1)類の実例に於いて推論した、「修行者本人が予想し、或は、予想できうる境地として設定されているわけではない。」という内容に類似した構造である。

以上第(1)類と第(2)類に共通するものとして推定した、〈実践――効果〉の機能構造が、第(3)類の「中間的な指示」にも通ずるとするならば、修行として初歩的な段階から、nibbāna に到る迄、学処の機能構造に、一つの一貫性があると認められるだろう。

問題の第(3)類の指示の中に注意を引く表現がなされているものがある。

Sn. 1035「アジタよ、世の中におけるあらゆる煩悩の流れをせき止めるものは、気をつけることである。（気をつけることが）煩悩の流れを防ぎまもるものである、と私は説く。その流れは智慧によって塞がれるであろう。」

この偈頌に示されたような「不断に気をつけている」ということがらが、最初期仏教に於いて、nibbāna の本質であった、という解釈は、先学によって示されている。ところで第(1)、(2)類に共通して推定された〈実践――効果〉の機能構造が成りたたないとすると、「不断に気をつけている」という nibbāna への論理は理解しにくいものとなる。寧ろ第(1)類第(2)類に推定した機能構造を前提として nibbāna への論理としての「不断に気をつけている」という意識構造が展開されていると思われる。

〔結論〕「学ぶべきもの」に従がう意志がある限り、第(1)類の如くの具体的直接的指示の存在によって修行の第1歩の位置が守られる。nibbāna への修行に於いては、更に前述した機能構造により守られることとなる。学処の本質は、その効果が修行者自身の判断思惟に依存しないという点にあると思われる。（注略）

（大谷大学大学院）

学処について（池　山）